

ミブナ

＼ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
周年栽培												

(凡例) ○ : は種 == : 本ば管理 ■ : 収穫

1. 必要な施設条件

(1) ほ場条件

保水力があって排水良好、土層が深く、有機質の多い砂質～壤土が適する。

(2) 設備条件

間口 5.4～6mのパイプハウス、鮮度保持用予冷施設
トラクター、管理機等

2. 品種例

地域固定種（生産者ごとに自家選抜してきた品種）
中白壬生菜 3号
F1京の舞（冬播き）

3. 作付け体系 周年栽培

4. 目標収量 2,000～2,500 kg / 1,000m²

5. 栽培のポイント

連作により地力消耗が大きいので、堆肥をほ場に入れて土づくりを心がけ、適切な水管理を行う。

6. 技術内容

(1) 本ば準備

は種 2週間前に灌水パイプ等を使って充分にほ場に水を打ち、トラクターがほ場内に入れるようになったら（灌水後、約1週間）、完熟堆肥と基肥をほ場全層に入れ、よく混ぜる。

施肥例 (kg/1,000m²)

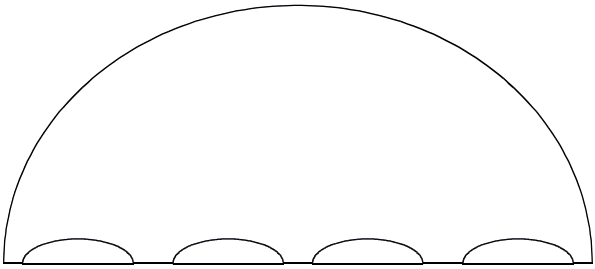
肥料名	基肥	追肥
完熟堆肥	2000	
化成肥料(10、8、10)	80	
高度化成(18、14、12)		25

畝立て

畝幅110～130cmになるように管理機を使って畝をたてる。ハウス1棟当たり4畝とする。

夏期は畝幅を90cmとしてハウス1棟当たり6畝とする。

間口 5.4 m のハウスの場合

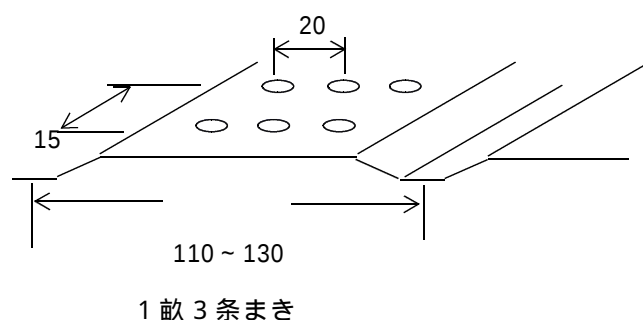


←→
130cm

ハウス1棟4畝

(2) は種

1畝3条まきで条間20cm、株間15cmになるようには種機を使用してまく。夏期は1畝2条で条間20cm、株間23cmにする。1点3粒程度落ちるように調整して点播きする。は種量は1,000m²当たり3dl程度になる。



(3) 間引き

本葉が2～3枚目が展開したところに1本に間引く。
間引きの際に虫害（食痕）のない株を残す。

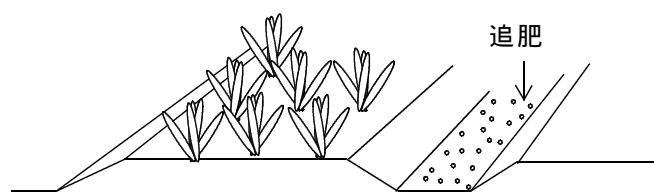
(4) 灌水

夏期は毎日夕刻に、秋から春は土壌水分をみながら朝行う。

生育後半は葉を折らないように頭上灌水をやめ、通路に水を張って灌水する。

(5) 追肥

冬期には栽培期間が長くなるため、肥切れを起こして葉色が落ちることがある。その場合、肥料が直接葉にかかっても障害の出ない肥料は畝上に肥料をばらまく。葉にかかると障害がでる肥料は通路にまき、灌水しておく。



(6) 病虫害防除（特にコナガ）

耕種的防除

(ア)施設のサイドや入口に1～2mm目合いの防虫ネットを張り、コナガ成虫の侵入を防ぐ。夏期はハウス内が高温になるので注意が必要である。

(イ)電撃殺虫器による成虫の捕殺

(ウ)太陽熱利用による土壌消毒

等を行いできる限り農薬に頼らない防除を心がける。

薬剤防除

コナガは薬剤抵抗性を獲得しやすいので、ローテーション散布を心がける。

農薬散布は、農作物病虫害防除基準に準じて行う

(7) 収穫と調整

草丈が35～40cm程度になったら収穫する。夏期はとう立ちしやすいので早めに収穫する。

また、夏期は生育旺盛であるため、葉色が濃くなり過ぎるのを防ぐために、収穫1週間前に寒冷紗をかけることもある。

調整作業に時間がかかるため、収穫は朝に行う。

収穫したミブナを作業場に持ち帰り、1株ずつ枯れ葉や根部の土を取って調整する。

調整後、6～8株を1束とし、1束2kgでPPテープで束ねて4束で箱詰めし、予冷库に入れる。

翌日のセリに間に合うように出荷する。

(8) 自家採種（地域固定種）

採種は交雑を避けるために、ハウスの中で行う。

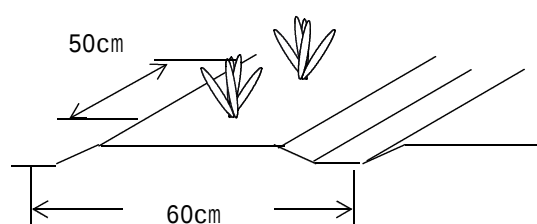
採種母本用に確保した種子を10月上旬には種し、11月中下旬に移植する。生育、葉の形質のよく揃った株を選抜し、生育の特に旺盛な株や生育遅れの株は避ける。

移植は幅約60cmの畝に、1条植え、株間50cmにする。

施肥は一般栽培と同様でよい。春にトウが立ち始めたら化成肥料を1株あたり約15gを追肥する。

6月頃、実が熟したら株ごと引いて乾燥させる。

乾燥後、棒などで叩いて種子を落とし、ふるいをかけて、冷暗所で保存する。



（富岡 豊）